

現代日本語の感情動詞「喜ぶ」におけるヲ格／ニ格選択要因

松 野 美 海

キーワード：格選択 感情動詞 コト・ノ節 個別的／非個別的事態

1. はじめに

現代日本語の「喜ぶ」は、「太郎は幸運 {を／に} 喜んだ」のようにヲ格、ニ格の両形式を許容する感情動詞^(注1)（以下、ヲ／ニ格感情動詞）である。このような2つの格体制をもつ動詞は少数ながら存在し、感情動詞ではほかにも「理不尽な扱い {を／に} 怒った」「突然の別れ {を／に} 悲しんだ」などがある^(注2)。

感情動詞の格形式に関しては、ヲ、ニそれぞれの格形式をとる動詞の特徴が注目され、ヲ／ニ格感情動詞については、言及されるものの中心的に扱われることは多くない。そのうち「喜ぶ」はヲ／ニ格感情動詞を扱う先行研究において、取り上げられることが多く、他の感情動詞に比べ、検討もされている。しかしそれでも、格形式による差異、格選択の要因は十全には明らかになっていない。本稿では「喜ぶ」の格選択要因を探るために、事例に基づいてヲ／ニによる差異を考察する。2節で先行研究を概観し、3節で事例の精査、4節で交替可能性について検討を行い、5節で考察、6節で結論を述べる。

2. 先行研究と問題の所在

感情動詞には「敵 {を／*に} 憎む」「花子 {に／*を} 惚れる」のように、ヲ格をとる動詞（以下、ヲ格感情動詞）とニ格をとる動詞（以下、ニ格感情動詞）が存在し、先行研究ではこれらの差異が注目されてきた（寺村1982、森山1988、佐藤1997など）。例えば寺村（1982）は、ヲ格感情動詞は持続的な感情を、ニ格感情動詞は一時的な感情を表すとする。また意味役割の観点から佐藤（1997）は、ニ格名詞（名詞句を含む。以下同）は原因を表すとする。一方ヲ／ニ格感情動詞について言及はあるものの、詳細に検討した先行研究は多くなく、それぞれの格形式をとった場合の差異や格選択要因は十分に明らかになっていない。ヲ／ニ格感情動詞の検

討がなされる主な先行研究に Endo and Zushi (1993)、BANDO (1996) (1997)、清水 (2007)、Akita (2007) などがあるが、本節では、ヲ／ニ格感情動詞として言及されることの多い「喜ぶ」を中心に扱う BANDO (1996)、従来とは異なる観点を示した Akita (2007) を取り上げる。

2.1. 意味役割の観点

BANDO (1996) は、ヲ／ニ格感情動詞の格表示は自由交替か否かという点について、感情動詞の補語の意味役割を考察し、「喜ぶ」を主な例に考察したものである。ニ格名詞は「感情の原因」、ヲ格名詞は「感情の対象」だとした Endo and Zushi (1993) を発展させ、ニ格名詞には「原因」と「対象」があいまいな例もあるとして考察を行っている。ニ格感情動詞の観察に基づき、ニ格名詞は基本的に「原因」と「対象」の両方の意味役割を担うとされる。使役化が可能(1b)、あるいはデ格と交替可能(1c)であれば「原因」の意味役割だとされる。一方(1)d, eのように「対象」としてのみ解釈されるニ格名詞もあることが指摘される。

- (1) a. 太郎は突然の電話に驚いた。
- b. 突然の電話が太郎を驚かせた。
- c. 太郎は突然の電話で驚いた。
- d. 花子はアイドル {に／*で} 憧れた。
- e. *アイドルが花子を憧れさせた。

(以上、BANDO1996: 171(11)–(13)^(注3))

ヲ／ニ格感情動詞においてもニ格例に関しては「原因」「対象」のどちらも担い得、どちらの意味役割が優勢かは名詞によるとされる。BANDO (1996) が述べるヲ格例とニ格例の違いについて(2)abにまとめた。(2)の「メアリー」は事態への参加度が高いとされ、その証左として、ノデ節へのパラフレーズ(「メアリーがプレゼントをくれたのでジョンは喜んだ」)ができることを挙げる。またヲ格の場合(2)bの解釈について、ジョンがプレゼントが何かを知らないことと非文になることを根拠としている。デと交替できる二の場合、予想外の出来事であることが許されるが、デと交替できずヲと交替できる場合、予想外の出来事ではないとされる。

- (2) a. ジョンはメアリーからのプレゼントに喜んだ。

【プレゼントをくれたメアリーに対して】

b. ジョンはメアリーからのプレゼントを喜んだ。

【メアリーではなくプレゼントの内容に対して】

稿者の内省によると「ジョンはメアリーからプレゼントをもらったので喜んだ」へのパラフレーズはヲ、ニどちらの場合も許容される。デ格との交替も必ずしも「原因」の意味役割をもつ指標とはならないと考える。BANDO (1996) で二格名詞が「原因」の意味役割をもつとされた「驚く」でも、デ格に交替させられない例(3a)や、ノデにパラフレーズでき、「原因」のように思われる二格でもデ格に交替させてにくい例(3b)がある。

(3) a. 突拍子もないことを言い出した花子 {ニ/*デ} 驚いた。

b. 顔の冷たい触感 {ニ/??デ} 震えた。

Cf.) 顔の触感が冷たいので震えた。

また(2)の解釈は、そのように解釈できるように思われる一方で、客観的に担保されたものではなく、稿者の内省では必ずしも成立しない。(2')のように(2)abとは反対の解釈を得る文脈でも用いることができる。

(2) a. ジョンはメアリーからのプレゼントに喜んで、お礼を言うのも忘れていた。【メアリーのことは頭になく、プレゼントに対して】

b. ジョンは、クリスマスには音沙汰のなかったメアリーからのプレゼントを喜んだ。【メアリーの行動（とプレゼント）に対して】

予想性に関しても実際に(4)のような実例が得られ、疑問が残る。

(4) 退屈な仕事の思わぬ中休みを喜んで、会話をひきのばしている。

(レジナルド・ヒル『幻の森』^(注4))

以上の点に加え、「原因」「対象」の観点からは、BANDO (1996) が指摘する先述の解釈の差異がどのように導かれるのか明らかではない。

先行研究はBANDO (1996) のように意味役割の観点から考察するものが多いが、「いい女に惚れる」のように、感情を引き起こす誘因と感情が向けられる指向先^(注5)とが同一と考えられる場合も少なくない。また、「対象」の意味役割をもつことの根拠の一つとしてしばしば用いられる直接受動化テストは、同一の動詞でも、二格名詞有情性や文の意味内容によって可否が変わる(5)。さらに受身文 a-2、b-2 が、ヲ格例から作成されたことを否定することができず、二格例、ヲ格例どちらからの受身化の結果なのかは不明である。

- (5) a-1. 太郎は花子の合格に喜んだ。 a-2. 花子の合格は太郎に喜ばれた。
 b-1. 太郎はテスト結果に喜んだ。 b-2. ?テスト結果は太郎に喜ばれた。

本稿は、「対象」「原因」のどちらかの解釈に傾く例があることを否定するものではない。動詞によって「原因」「対象」の意味役割が関与的である場合もあるだろう。しかし少なくとも「喜ぶ」は感情の生起という事態に関して、ヲ／ニ格名詞は原因でも対象でもあり得る(例がある)と考えられ、名詞との一対一の対応を想定する意味役割とは別の観点からも、選択要因を探る必要がある。

2.2. 「視点」の観点

Akita (2007) は、Endo and Zushi (1993) が指摘する、動詞における individual/ stage-levelの違いや、寺村 (1982) 等が指摘するアスペクト的特徴は格選択に関与的ではないと主張し、(6)のような例からヲ／ニ格感情動詞は、事態を引き起こしたものの(原因)と引き起こされた事態の両方に「視点」^(註6)を置くことができ、原因が強調される場合はニ格、感情が引き起こされたことが強調される場合はヲ格をとるとされる。Akita (2007) は(6)aを彼女の同意に対して喜んだのであり、返事そのものに喜んだのではないとし、(6)bをケンの努力が強調されているとする。

- (6) a. ケンはミキの素気ない返事 {に／??を} 喜んだ。

- b. ケンは欲しくもないそのプレゼント {??に／を} 無理して喜んだ。

(p. 291(16))

確かに(6)bではAkita (2007) の主張のように解釈できるように思われるが、(6)aやほかの例文判定への疑問(例えば「マイはミキの結婚 {に／??を} 思わず悲しんでしまった」(p.291)は稿者にはどちらも許容できる)が存する。さらに「視点」だけでは説明が難しい例も存在する。例えば(7)はヲ格をとるが、「ケーキ」と「ショール」を比較しており、感情の生起よりもヲ格名詞が問題になっている。

- (7) ハイジには、おばあさんが、ケーキより灰色のショールのほうをずっとよ
こんだのが、ふしぎでなりませんでした。

(ヨハンナ・シュピリ著／上田真而子訳『ハイジ』)

2.3. 本稿の課題

いずれの先行研究でも、「喜ぶ」のヲ／ニ格例の差異、およびヲ／ニ格表示との

関係が十分に説明するには至っていない。本稿では、先行研究に反例、説明の難しい例が見られたことから、実例に基づいて様相を記述することに重点を置き、そのうえで、意味役割、「視点」とは異なる観点から格選択要因の分析を試みる。なお、「喜ぶ」は常にヲ／ニ格交替が可能であるわけではないが、それぞれの格表示での差異が考察対象であるため、同一文においては格交替させられない例を含めて考察を行う。

3. 「喜ぶ」の実例における様相

3.1. 調査概要

3節では「喜ぶ」がヲ／ニ格をとる際の様相を、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』（国立国語研究所「中納言」使用）の実例をもとに考察する。検索対象は書籍に限定した。これは格表示が、話し言葉に近いものよりも書き言葉に多く現れること、十分な用例数が得られること、コーパス所収の資料のうち比較的多様な文体が得られると考えられることによる。考察対象は「喜ぶ」と同一文中にヲ格またはニ格で補語が表示されているものとする。検索の便から、動詞「喜ぶ」から前10語以内（機能上10語が最長）に助詞ヲまたはニが表れるという条件^(注7)で検索したのち、ヲ／ニ格名詞が共起する用例を手作業で確認、採集した^(注8)。以上の作業を経たのち、得られたのはヲ格例537例、ニ格例40例である。ヲ格例に大きく偏る一方で、ニ格例も無視できない程度に存在する。

調査結果において特徴が見られたのが、ヲ／ニ格名詞の種類である。「喜ぶ」のヲ／ニ格名詞の種類を示した表1から、ヲ／ニ格例ともに具体名詞をとる例が少ないことが分かる。先行研究ではコト・ノ節をとる例に言及されることはほぼないが、実際には具体名詞は現れにくく、コト・ノ節をとる例が頻用されており、従来のような具体名詞の作例のみを用いた考察では不十分だと言えよう。以下では実例に基づき、特にヲ格例に顕著に現れたコト・ノ節と事態性名詞をとる例を中心に考察を行う。

【表 1】「喜ぶ」におけるヲ／ニ格名詞の種別用例数

	ヲ格例数 (537例)	%	ニ格例数 (40例)	%
抽象名詞	96	17.9	19	47.5
抽象 (事態)	37	6.9	0	0
事態性名詞	151	28.1	7	17.5
コト節／ノ節／ その他節	195	36.3	4	10.0
(内訳：コト節	(131)	(24.4)	(4)	(10)
：ノ節	(62)	(11.5)	(0)	(0)
：その他の節)	(2)	(0.4)	(0)	(0)
コト	11	2.0	0	0
具体名詞	41	7.6	9	22.5
その他(何)	4	0.7	1	2.5

3.2. ヲ／ニ格名詞の事態性

3.2.1. コト・ノ節の取りやすさ

表 1 から、ヲ格例においては、コト節、ノ節、その他（準体節、疑問節）をとる例（以下、その他を含め「コト・ノ節をとる例」）を合わせて36.3%（195例）で最も高いことがわかる。これらのコト・ノ節をとる例は、「花子がプレゼントをくれたこと」のように感情の指向先・誘因が事態であることが明示される。一方、「花子 {の／がくれた} プレゼント」のようなモノ名詞（抽象名詞を含む）をとる例は、花子がプレゼントをくれたという事態を含意するとしても^(注9)、表現上は事態ではなく、モノを感情の指向先・誘因としている。この意味でコト・ノ節は積極的に事態を表すと言える。例(8)はヲ格・コト節、(9)はヲ格・ノ節で、それぞれ「強力な味方ができた」「雨季が遅れている」という事態に対する感情である。ニ格例では(10)を含むコト節4例（10%）のみである。(10)は「砂金が贈られてきた」という既実現の事態をとる点で(8)と共通し、両例は格表示を交替させても自然である。

(8) とにかく強力な味方ができたことを私たちは喜んだ。

(佐藤健『マンダラ探険』)

(9) しかし洗濯屋さんたちは唯一、雨季が遅れているのをよろこんでいるようだった。

(椎名誠『インドでわしも考えた』)

(10) そこへ奥州から砂金九百両が贈られてきたことに、聖武天皇は大いに喜び、

年号を天平から天平勝宝に改めたほどである。（高橋克彦編『東北歴史推理行』）

コト・ノ節をとる例に類するのが、サ変動詞語幹または動名詞（Verbal Noun）^(註10)と呼ばれる語、動詞連用形由来で事態を指す名詞である。これらの名詞を合わせて「事態性名詞」とする。(11)aは二格例で「成功」を、bはヲ格例で「出迎え」をとる例である。ヲ格例における事態性名詞の割合は約28%を占める。

また(12)a「火事」のようなイベントを表す名詞や、b「死」などは、事態名詞に準ずる名詞として、事態を表す抽象名詞に分類した。事態を表す抽象名詞の例はヲ格例が得られる一方で、二格例は調査範囲内では見られない。これは二格例にコト・ノ節や事態性名詞をとる例が少ないことと同様の現象と言える。

(11)a. 八王子は、全国の精神病院に先駆け、ロボットミーを試行した。凶悪犯さへたちまち従順になるその成功に喜び、全国の精神病院は雪崩をうって八王子に続いた。（見沢知廉『調律の帝国』）

b. ところが、ぼくの出迎えをよろこぶどころか、玄関の三和土と次の間は大変な騒ぎだった。（川島民親『スズメバチの死闘』）

(12)a. 娘は立ち止まった。火事を喜んでいるかのように手を叩く。

（大栗丹後『裏隠密吼ゆ』）

b. 朝臣たちは万歳を唱えて、董卓の死を悦びあったが、ただ一人、街に晒された董卓の死体の前で慟哭した者がいた。（安能務『三国演义』）

事態を表す抽象名詞と、先に見たコト・ノ節、事態性名詞の例を合わせると、ヲ格例では約7割（383例、71.3%）を占める一方、二格例では27.5%（11例）である。

二格例の特徴としては抽象名詞の割合の高さがある。ヲ格名詞にコト・ノ節をとる例が多いのに対し、二格例で最も高い割合を占めるのは(13)のような抽象名詞である（表1：19例、47.5%）。

(13) キース・ヘリングのような若い画学生以上にこの手軽なアートに最も喜んだのは、ニューヨークのスラムに住む貧しい階級の若者達であった。

（伊東順二『現在美術』）

ヲ格例は事態を表す名詞をとる傾向が強く、二格例はヲ格例ほど事態への指向性は見られない。

3.2.2. ヲ／ニ格名詞の時間的特徴

本小節では、まずコト・ノ節をとる例の特徴を記述する。ヲ格例に表れるコト・ノ節の事態には、感情の生起時を基準として、既実現事態(14)「無事に帰れたこと」、継続事態(15)「騙されていること」、未実現事態(16)「お目にかかること」のいずれも現れ得る。(16)の「お客様にお目にかかること」は、この客が娘に会いに来訪してきたことを娘が知っていて、その成立が感情主(娘)にとって確かなものとして捉えられているが、感情の生起時を基準とすると、未実現事態である。さらに個別に実現する事態ではなく、一般的または反復的な非個別的事態の例も得られる。(17)の「学校が休みになる」ことは、毎年クリスマスの時期に生じる不特定多数の人物にとっての非個別的事態である。

(14) 「おじさんの設計図のことより、ぼくたち二人も、日本アルプスから、無事に帰れたことを喜ばなけりゃ…。(略)」(斎藤栄『少年探偵ジャーネ君の冒険』)

(15) 「そして私たち騙されていることを喜んでるわ」(森村誠一『凍土の狩人』)

(16) 「私に娘がおりまして、まだ小娘で、遊芸の技もまだ未熟でございますが、お客様にお目にかかることを喜んでおります。どうかお会いしてやってください」(乾一夫／内田泉之助『唐代伝奇』)

(17) 伝統的に人びとはクリスマスになると贈りものをします。そして数日の間学校が休みになるのを喜びます。

(ルドルフ・シュタイナー(著)／高橋巖(訳)『魂のこよみ』)

事態性名詞でも同様に、ヲ格名詞には未実現事態や非個別的事態が現れる。(18)の「自画自賛」は一回的な事態ではなく、一般的に「自画自賛を喜ぶ」人がいないことを述べる。ニ格例には、既実現事態(19)「砂金が贈られてきたこと」、継続事態(19)「値段が下がっていること」の例は存在するが、調査範囲内においては未実現事態と非個別的事態の例は得られない。

(18) 黒人は能力について自画自賛することに否定的だ。モハメド・アリも、自画自賛を喜ぶ者はいないと語っている。

(トマス・カーチマン(著)／石川准(訳)『アメリカ黒人の鼓動が聞こえる』)

(19) ものの値段が下がっていることにばかり喜んで買い物をする前に、デフレの問題点を考えれば(略)(山崎えり子『節約生活のススメ』)

以上のように、ヲ格例にはニ格例にはない、未実現事態に対する感情を表す例、

非個別的事態を表す例が見られる。

次に事態性の名詞以外の例を挙げる。ニ格例⑳の「折り鶴」、ヲ格例㉑の「金魚」は当該文脈で個別のモノを指す。一方ヲ格例㉒は一般論としての記述であり、「甘いもの」は特定・個別のモノを指さない。

- ㉒ 「ほらね、鶴ですよ、元気になってくださいね」(略) こんな風に、たった一羽の折り鶴に涙を流して喜んでくださる方との出会い。

(田原米子『ひかり求めて』)

- ㉑ 持参のみやげを手渡した。武彦は金魚を喜んだ。(出久根達郎『笑い絵』)

- ㉒ 「日本の方々は塩辛いものを好まれます。ヨーロッパでは甘いものを喜びます」
(土岐信吉『千利休』)

㉒のような用例はコト・ノ節をとるヲ格例の場合に非個別的・非一回的事態を表し得たのと同様で、「好む」に近い用法と言え、このような例はニ格例には見られない。

4. ヲ／ニ交替の可否

本節では、ヲ／ニ格の差異が明確に現れるであろう交替不可の場合、あるいは交替させにくい場合について検討する。調査範囲内では交替不可の例は多くない。交替させられない、または交替させにくい例は、ヲ格例の24.6% (132例)、ニ格例の22.5% (9例) であった。完全な自由交替とは言えないものの、交替可能な場合が多いことがわかる。まず、ヲ格からニ格への交替について、交替させられない場合と、交替させにくい場合を㉓に挙げる。交替させにくい例は、後述するニ格からヲ格への交替も含め、交替させた方の格表示例は調査範囲内ではほぼ出現せず、作例においても交替させにくい。ただ実例を内省で交替させた場合に揺れ(許容できる場合)があり、完全に交替不可とは言えないため、「交替させにくい」例としている。

- ㉓ A. ヲ→ニ交替ができない例^(注11)

- ① 感情主体の性質を表す場合。
- ② 感情(「うれしく思う」など)以外を表す場合。(「寿ぐ」「祝う」のような意味を表す場合)
- ③ 「のこと」をとる場合。

- B. ヲ→ニ交替がさせにくい例

- ④ ノ節をとる場合。

⑤ 非個別的事態を表す場合。

②4aは、日本人が魚を生で食すことを好むという、不特定多数を感情主とした、一般的な性質について述べる①の例である。bのように個別の事態を述べる場合は二格表示も許容される。

- ②4a. 「(略)(稿者注：魚を)日本人は^(原文ママ)生まで食べること {を／*ニ} はるかに喜ぶ」
(森枝卓士『すし・寿司・sushi』)

b. 節制していた太郎は、久しぶりの甘いもの {に／を} 喜んだ。

現代語では多くないが、②「寿ぐ」等、祝いの意を含む場合も二格表示できない(「その祝い言葉には普請をする施主の発展 {を／*ニ} 慶ぶ文句が多く見られます。」宮内仁『日本の木遣唄』)。③に関して、「シャツ」だけであればヲ、ニともに許容できる(「カマドがそのシャツ {を／ニ} 喜んだ」)が、②5のように「のこと」の場合、ヲ格のみが許容される。田窪(2010)は名詞+「のこと」について、「なんらかの形で名詞(句)の指示物と関連付けられる出来事のいくつか、あるいはすべてを意味する」「属性抽出標示」(pp.131-132)であるとする。二格では「属性抽出」された名詞をとることができないと考えられる。

- ②5. そのような品は受け取れないと言うと、(略)じつはカマドがそのシャツのこと {を／*ニ} 喜んだし、ぜひ仁松に差し入れするようと言いつかつたのだ、
と言った。(大城立裕『日の果てから』)

④ノ節をとる場合、②6のように二格に交替させると不自然である。判断に迷いつつも交替操作ができる例もあるが、調査対象を見る限り実例には表れないため、交替させにくい場合として扱う。

- ②6. わたしに逢えたの {を／??ニ} 喜んでくれないの？

(若林真紀『この愛にできること』)

この例においては、逆接のノニと紛らわしいために交替させられないものと考えておくが、今後、他の動詞についても調査を行ない、ノ節と二格の関係について検討を加えたい。

⑤非個別的事態とは、特定の感情主体を想定していない場合(もしくは複数の感情主を想定している場合)や、反復して生起する事態をとる場合である。②7は特定の感情主体を想定していない。②8のような習慣や好みを述べる場合はヲ格のみが許容される。これは①「感情主体の性質を表す場合」に近いものと考えられる。この

ように一回一回の事態を想定しないものは、ヲ格表示のみ自然である。感情主体が不特定多数であっても、㉨のようにそれぞれの感情主に個別の事態を明らかに想定できる場合は二格表示が許容できる。

㉦ 黒人は能力について自画自賛することに否定的だ。モハメド・アリも、自画自賛 {を／*ニ} 喜ぶ者はいないと語っている。 (例18再掲)

㉧ この頃の二人の日課は、昼前に起きて一緒に近くのスーパーに買い出しに行き、食事を作って食べる。それから、一時間くらい散歩です。(略) 四海は散歩 {を／*ニ} とても喜びました。 (葉青『蛭降る惑星』)

㉨ 相対評価主義は往々にして競争意識を強めることによって全体のレベルアップを促す反面、友人の失敗 {を／ニ} ひそかに喜ぶような歪んだ競争心を植えつけたり (略) (高木哲也『謝らないアメリカ人すぐ謝る日本人』)
次に㉩に二格からヲ格に交替させにくい場合を挙げる。

㉩ ニ→ヲ交替がさせにくい例

二格名詞が定のヒト名詞の場合。

二格例のうち、ヲ格表示がしにくいのは㉪のような定のヒト名詞の場合である。この場合、「出海」という人物が「自分の気持ちを察して、優しいことを言ってくれる」という修飾や前文脈によって当該人物のどのような行動・状態が感情生起に影響したが説明される。ヲ格例にも1例のみ㉫が得られたが、この例はゲーテが書いた書評中のモノローグ的な部分であり、「歓迎する」に近い意味を表す、㉫②の例だと考える。「うれしく思う」という解釈であれば、二格への交替が可能である。なお㉪㉫はヲ／ニ格名詞が定名詞だが、㉬のように、不定名詞、つまり非個別的事態として解釈できれば、ヲ格も許容されやすい。

㉪ 自分の気持ちを察して、優しいことを言ってくれる出海 {に／*ヲ}、愛美はとても喜んだ。 (蒼雲騎龍『迷路』)

㉫ 平凡な、個々の女性的美点に満足しないこの移り気な男 {を／ニ} われわれは喜ぶだろう。しかしそれから、ああ、守護神よ、この若者のあいまいな態度が心の浅薄さ、軟弱さのせいでないことが明らかになりますように。

(アルベルト・ビルショフスキ著／高橋義孝、佐藤正樹訳『ゲーテ』)

㉬ 太郎は、決断の早い人物を喜ぶ。

以上、ヲ／ニ交替できない(しにくい)意味的側面、構文的側面を示した。

5. 考察

3 節では、動詞「喜ぶ」が、1) ヲ格例ではコト・ノ節、事態性名詞に偏るが、二格例ではこれらは少なく、抽象名詞をとる例が半数近くを占めること、2) ヲ格例では未実現事態をとったり、非個別的事態の記述であったりする一方で、二格例は個別的事態であることを指摘した。また4節の観察から、感情を中心に表さない用法と形式を除き、ヲ格のみ許容される、あるいは二格が許容されにくいのは3-1) 感情主の性質を含む、非個別的事態を表す場合、および3-2) ノ節、「属性抽出標示」(田窪2010) のノコトをとる場合、4) 二格からヲ格に交替させにくいのは定のヒト名詞の場合であることがわかった。

4) については、ヒト名詞の場合に交替させにくくなる理由は今後明らかにする必要があるが、当該二格例が定名詞をとる個別的事態の描写であることは、2) と一致する。2) 3-1) 4) より、ヲ格例は、一般的あるいは反復的な事態や未実現事態をヲ格名詞としてとることが可能であり、文全体で非個別的事態を表す用法もある一方、二格例は非個別的事態を表しにくいとまとめられる。これは動詞「喜ぶ」のもつ意味領域をヲ／二格が(緩く) 分担していることの表れだと考えられる。この未実現事態と、非個別的事態である一般的・反復的事態は、概念的にまとめあげられた事態と言える。

1) について、先述のようにコト・ノ節、事態性名詞が表すのは事態である。「喜ぶ」は③4bのように「～を知って」「～を見て」など、感情の指向先・誘因となる事態が知覚・認識動詞のテ形節で示されることがあり、コト・ノ節で示されるヲ格名詞は意味上ではこのような文に近いと考えることができる。

③4 a. 花子が帰国したことを喜んだ。

b. 花子が帰国したことを知って喜んだ。

コト・ノ節以外の名詞をとる場合と比較して、状況説明的だと言えよう。

以上から、

③5 「ヲ喜ぶ」は事態が概念的にまとめあげられた名詞をとることができ、またより説明的に描写する用法をもつ。いずれも、「ニ喜ぶ」とは異なり感情の生起時点から離れた描写が可能であることに因る。

とまとめられる。もちろん「うれしい」などの感情形容詞とは異なり、そもそも動詞であることで現場性は劣り、説明的である。しかし格表示の違いによって、その

程度が異なるということである。感情形容詞がそうであるように、感情を描写する際に典型的なのは、指向先・誘因に接した時点で生じる感情を表すことだと考えられるが^(注12)、動詞では、感情生起時を離れた描写も担うことがあるだろう。その際にヲ格が選択されるのである。

「ニ喜ぶ」は個々の感情主の既実現事態や、(抽象物を含む)モノに対する感情である個別的事態を表すのが中心である。3-2)に示したように「属性抽出標示」(田窪2010)の「のこと」を付加すると二格表示が許容されない(「太郎のこと {??ニ／ヲ} 喜んだ」)。「抽出」過程を経たことを示す「のこと」が許容されないことから、二格は概念化を経ない、直接的な感情の指向先・誘因を示すと考える。二格はコト節と共起しにくい、二格例にはコト節以外にも多くはないものの事態性名詞が具体名詞に次いで一定程度見られ(7例、17.5%)、事態をとれないわけではない。この点への説明は今後の課題となるが、本稿では、二格例の「感情生起時点から離れた描写」を行わない特徴によると考えておく。

松野(2017a)では、現代語「恐れる」のヲ格例が二格ではとらない未実現事態をとること、中世には補文節をとる場合、ヲ格例が事態、二格がモノに偏って分布していたことが指摘されており、本稿の指摘との共通点がある。一方で松野(2017a)では「あこがれる」の二格が「喜ぶ」「恐れる」のヲ格例と共通する特徴を見せることが指摘されている。これらの共通点・相違点に関する検討は稿を改めたい。

ここで2節で示したヲ格例と二格例の予想性の解釈の違いについて考察する。BANDO(1996)では36)のような例において、二格ではプレゼントが予想外であるとの解釈になり、ヲ格ではそのような解釈にならないとされる。

36) 太郎は花子からのプレゼント {を／に} 喜んだ。

「ヲ喜ぶ」のように概念的にまとめあげる過程を経ることは、予想外の事態に接した反応にはそぐわないと考えることができる。「ニ喜ぶ」は概念化した事態をとらず、まとめあげる過程を経ないため、「ヲ喜ぶ」と比較すると表出用法をもつ「むかつく」などに近い。そのため予想外の事態への即時的な反応と親和性があると考えられる。この過程を示し得る(用法がある)か否かによって、解釈の違いを生み出す余地が出ると考えられる。ただしこの解釈の違いは、ある文脈で概念化を経るか否かが予想性の差異として解釈される可能性を有するということであって、先述のように、必ずしも予想の有無と格表示が連動するわけではない。

また先述のように Akita (2007) は、原因が強調される場合は二格を、事態が起こったことが強調される場合はヲ格をとるとする。このことと「ヲ喜ぶ」は説明的に描写するという本稿の考察は矛盾しない。しかし本稿では、ヲ格をとる場合、感情の生起に Akita (2007) の言う「視点」があるというよりも、感情の誘因・指向先を含めた全体を、現場から離れたところから描写するものと考ええる。

「視点」で説明できない例として挙げた⑦は、比較し選択される対象「灰色のショールのほう」にヲ格が用いられている。比較は即時的な感情の描写とは言えず、そのためにヲ格が選択されたものと考えられる。調査範囲内の二格例に比較対象の例は見られない。

⑦ ハイジには、おばあさんが、ケーキより灰色のショールのほうをずっとよ
こんだのが、ふしぎでなりませんでした。(例(7)再掲)

ここまでの考察から、ヲ格をとる感情動詞が持続的な感情を表すとする寺村(1982)やヲ格名詞の意味役割を「対象」とする先行研究は、「ヲ喜ぶ」の用法の一面を捉えていると言える。ただ、「当選 {を／に} 一瞬喜んだが…」のように副詞「一瞬」で、一時的な感情であることを明示してもヲ格表示は自然であることから、一回の感情の生起が継続するか否かではなく、一回の個別的事態（の積み重ね）か、非個別的事態かという観点のほうにより「喜ぶ」の実態を捉えることができるのではないか。「ヲ喜ぶ」に関して言えば、個別的事態において持続的な感情を表す側面と、非個別的事態の描写という非一時的な感情を表す側面という二面で捉え直すことができる。また先述のように、感情に関しては「原因」と「対象」は明確には区別ができない。この点に関しても二格例では個別的事態を、ヲ格例では個別的事態だけでなく、非個別的事態も表すという、事態の性質の観点によって、より適切に「喜ぶ」の格選択の様相を把握できると考える。

ここで定延(2006)が示す、体験／知識表現と格表示との連動を参照したい。定延(2006)は、動態表現において、話し手や書き手の体験としての表現と知識としての表現が構文上にどのように現れるかについて考察したものである。定延(2006)は、ヲ／二格をとり得る「訪れる」に関して、二格表示される場合は、出現に重点が置かれた、到着地にいるため移動の過程を感知できない体験者の側からの表現であるとし、ヲ格表示される場合は「探訪するというデキゴトを外から観察した知識の表現」(p.62)とする。「ヲ喜ぶ」が事態を節で展開された形によって説明的に描

写するというのは、定延（2006）に則って言えば、知識表現により重点があるものと言える。「喜ぶ」は「嬉しい」などの感情形容詞とは異なり、感情表出はできない。この点で体験性は劣るが、感情形容詞とヲ格例の中間に位置するのがニ格例だと考えると、知識表現よりも体験表現に寄ることが、ニ格例にコト節の例が少ない理由の一つとして考えられる。

6. 結論

以上、「喜ぶ」の特徴・用法を格表示との関係から記述・考察した。「喜ぶ」はヲ格をとる場合に、感情生起時から離れた説明的な描写・概念化を経た描写を行うことができ、これがヲ／ニ格選択に影響を与えていると考える。これが具体的にヲ格のコト・ノ節への偏り、未実現事態や一般的・反復の事態に対する感情の描写として現れるのである。

本稿では特にヲ／ニ格名詞の事態性に注目して考察を進めたが、動詞の文中での分布などの構文的特徴や名詞の意味なども考慮する必要がある。また格選択への要因とその影響度は動詞によって異なると考えられる（松野2017a）。先述のように「恐れる」には「喜ぶ」との共通点が見られそうだが、一方で例えば「怒る」の場合、意志性が関与的だと予想される。「怒る」がヒト名詞をとる場合、ヲ格では「叱る」の意味を持ち、意志性が高く（「花子は次郎を怒った」）、ニ格では「叱る」の意味に限られない。また「頼る」は松野（2017b）によると全体への影響性が関与する。以上から各語の考察が必要だと考える。いずれも稿を改めて論じたい。

注

（注1）本稿では心理的な動きや状態を表す動詞を「感情動詞」とし、「見る」「痛む」などの知覚動詞、感覚動詞を含まない。

（注2）感情動詞以外では「触る」「訪れる」など。

（注3）BANDO（1996）の表記を私に改めた。以下、Akita（2007）の用例も含め同様。

（注4）以下、出典記載のある用例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からの用例、記載のない用例は作例である。

（注5）意味役割とは異なることを明確にするため、本稿ではヲ／ニ格名詞と感情の関係を、指向先・誘因と称する。

（注6）影山（1996）から発展させたものとされる。

（注7）ヲ格補語は比較的動詞から離れた位置にも生起し得るが、ヲ格例全体の用例が多いこ

とから、取りこぼしていたとしても、全体の傾向は把握でき、論には差し障りがないと判断した。

(注8) 著者の生年が1910年代以前の用例、受身、使役の用例は除外した。また「喜ぶ」の前にヲ格またはニ格を要求する他の動詞のテ形・連用形が表れる場合(例「結果を聞いて喜んだ」)と、「喜ぶ」が中止形で他の動詞を後接させ、後接動詞の様態を表すと解釈できるもの(例「結果を喜んで受け入れよう」)も除いた。

(注9) 例えばBANDO(1996)では、「花子のプレゼントに喜んだ」におけるニ格名詞が原因の解釈をもつ場合、「花子がプレゼントをくれたので」とパラフレーズでき、「喜ぶ」という感情がプレゼントをくれた花子の態度に向かうとされる。

(注10) 影山(1993)など。

(注11) ニ格例からヲ格例に交替させにくい例は少数得られるものの、まったく不可の例は調査範囲中には見られない。この点とヲ格例数の相対的多さから、「喜ぶ」の格表示はヲ格が中心的役割を担っていると推測される。

(注12) 感情の生起時点を基準としたもので、発話時現在とは限らない。またその感情が持続するか否かは別の問題である。感情動詞と感情形容詞の接点(および差異)についての考察は別稿に譲る。

参考文献

- 天野みどり(2014)「再帰構文」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 編(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 金水敏(2000)「1 時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子編『日本語の文法2 否定と取り立て』岩波書店
- 定延利之(2006)「動態表現における体験と知識」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』くろしお出版
- 佐藤響子(1997)「ニ格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』48(2・3)横浜市立大学学術研究会
- 清水泰行(2007)「心理動詞の格と意味役割の対応・ずれ―「引用構文」における名詞句と引用節の意味関係から―」『日本文芸研究』58(4)、関西学院大学日本文学会
- 城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄編『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 杉本武(1986)「格助詞―「が」「を」「に」と文法関係―」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- (1991)「ニ格をとる自動詞―準他動詞と受動詞―」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 田窪行則(2010)『日本語の構造 推論と知識管理』くろしお出版

- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 編 (1993) 『日本語の格をめぐる』 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法 3』 くろしお出版
- 松野美海 (2017a) 「格交替を許容する日本語感情動詞の格体制についての研究」 名古屋大学大学院文学研究科 博士学位論文
- (2017b) 「現代語タヨルにおける格形式と用法」 『Nagoya Linguistics』 11、名古屋言語研究会
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」 『日本語科学』 8、国立国語研究所
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- Akita, Kimi (2007) “One Experience Viewed in Two Ways: A Viewpoint Approach to the Case Marking Patterns of Japanese Psych-Verbs”, 影山太郎編『レキシコンフォーラム』 3、ひつじ書房
- BANDO, Michiko (1996) “Semantic Properties of -Ni NP and -O NP of Japanese Psych-verbs”, 『大阪大学言語文化学』 5、大阪大学言語文化学会
- (1997) “Syntactic Properties of Japanese Psych-verb: With Special Reference to YOROKOBU”, 『鳴門英語研究』 11、鳴門教育大学
- ENDO, Yoshio, and Zushi, Mihoko (1993) “STAGE / INDIVIDUAL - LEVEL PSYCHOLOGICAL PREDICATES”, *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, eds. by Heizo Nakajima, Yukiko Otsu, Kaitakusha, Tokyo
- Hopper, Paul J. and Thompson, Sandra A. (1980) “Transitivity in grammar and discourse”, *Language*, 56 (2)

調査資料・用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言)、国立国語研究所, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

付記：本稿は、2017年3月に名古屋大学大学院文学研究科に提出した博士学位論文の一部を大幅に加筆・修正したものである。

(まつの・よしみ／名古屋工業大学留学生センター准教授)